法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-01

「入潮為」(万葉集一二三四番歌)の訓読について

阿部,美菜子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
76
(開始ページ / Start Page)
12
(終了ページ / End Page)
21
(発行年 / Year)
2007-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010152

「入潮為」(万葉集一二三四番歌) の訓読について

阿
 部
 美菜
 ス

はじめに

リする」「イホリする」の三通りの説があり、諸注釈書は第三表記は集中他に例がない。その訓みには「カヅキする」「アサているのだろうなと案じる歌である。第三句原文「入潮為」のを進めかねて磯辺に居ると、自分は旅人ではなく海人と見られこ五〇)の中に含まれ、旅をしている「我」が、潮の早さに船二五〇)の中に含まれ、旅をしている「我」が、潮の早さに船二五八十五、万葉集巻七の雑歌、羈旅作歌九十首(一一六一~一

・カヅキする→『全集』『集成』『全注』『新全集』『新大系』

「入潮為」を次のように訓んでいる。

[釈注]

・アサリする→『大系』『注釈』

・イホリする→『私注

れる。
第四句「海人とや見らむ」は官人の旅愁をいう表現として知ら第四句「海人とや見らむ」は官人の旅愁をいう表現として知ら問題の第三句「入潮為」は、海人を形容する語である。また、

が集中になく、候補から外して良いだろう。
メージが薄い。加えてイホリには、「海人」と共に詠まれる例で住むことを表し、カヅキ、アサリと比べてみても水・海のイで住むことを表し、カヅキ、アサリと比べてみても水・海のイー方、イホリには漁をする意はなく、草や木で粗末な家をつくっの歌と同じく「海人」と共に詠まれる用例も集中に確認できる。カヅキとアサリは共に魚介類をとる意を持つ語であり、問題カヅキとアサリは共に魚介類をとる意を持つ語であり、問題

一 カヅキ説とアサリ説

いるのだろうか。ここに具体的に示そう。注釈書はどのような根拠をもって第三句「入潮為」を訓んで

カブモつゑな「し朝」は「明◆カヅキ…『全注』より引用

一一八六、一二一八)が、「入潮」では無理であろう。
 かヅキの原文「入潮」は「潮ニ入ル」意の漢文的表記。「潮」は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするように、海が半の原文「入潮」は「潮ニ入ル」意の漢文的表記。「潮」カヅキの原文「入潮」は「潮ニ入ル」意の漢文的表記。「潮」とするように、海流の漢文的表記。「潮」

◆アサリ…『注釈』より引用

に入と書たるはかつぎと訓べき也」といひ、略解に「宣長類(十三・一〇五)、紀、陽その他アサリとある。考に「潮「入潮」を元、古(三・三八ウ)、細、西にカヅキとあり、

あらうか。

「朝入」の例(一一六七、一一八六、一二一八)はいくつもあるが、「入潮」はここ一例のみで、アサリと訓いくつもあるが、「入潮」はここ一例のみで、アサリと訓いくつもあるが、「入潮」はここ一例のみで、アサリと訓いくつもあるが、「入潮は朝入の誤にて、あさりするならむと言へり」とは、入潮は朝入の誤にて、あさりするならむと言へり」と

の誤りとしてアサリと訓んでいる。「朝入」をアサリと訓む用例があることから「入潮」を「朝入」否定している。アサリ説は古写本にアサリとあることを示し、中に潜る」意と捉えてカヅキと訓み、アサリ説を表記の面から カヅキ説は「入潮」を「潮(海水・潮流)に入る」つまり「海

「入潮」を「潮に入る」と解釈すると、水に潜ることの他、「入潮」を「潮に入る」意として考えられるので、『全注』のおうに潜水漁に限定することはできない。また、アサリ説の「入潮」を「朝入」の誤りとすることも『全ように潜水漁に限定することはできない。

二 カヅキとアサリの用例

二語はどのように使用されているのか、それぞれ確認し比較し訓の候補はカヅキとアサリの二訓である。では、集中でこの

たい。

(一)カヅキの用例

数える。原文表記は、 「潜く」の用例は全部で十九首二十例 仮名書きの例を除いて全て「潜」字表記 ① (1) (19)

②磯の上に爪木折り焚き汝がためと我が潜き来し①…野島の海人の一海の底・沖ついくりに「鮑工会」が動作の主体になる例 鮑玉さはに潜き

(潜来之)

③楽浪の志賀津の海人は我なしに潜きはなせそ(潜者莫為)の白玉(巻七・一二〇三) 立たずとも(巻七・一二五三)

波

沖

④大船に梶しもあらなむ君なしに潜きせめやも (潜為八方) 波

⑥海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りし潜きするかも(巻七・一三〇一) (潜為 (潜為)

⑦潜きする(潜為)海人は告(の)れども海神の心を得ねば見海人は(巻七・一三〇二) ゆといはなくに (巻七・一三〇三)

⑧底清み沈ける玉を見まく欲(ほ)り千(ち)度 りし潜きする(潜為)海人は(巻七・一三一八) へ(たび) そ告

⑨伊勢の海人の朝な夕なに潜く (巻十一・二七九八) (潜)といふ鮑の貝の片思にし

> ⑪耳無の池し恨めし我妹子が来つつ潜かばなど。 まぎもご は(巻十二・三〇八四) ⑩海人娘子潜き取る(潜取)といふ忘れ貝よにも忘れじ妹が姿。 ままじゅぎ (潜者) 水は涸が n な

む(巻十六・三七八八)

③珠洲の海人の沖つ御神にい渡りて潜き取る(可都伎等流) はめやも(潜将相八方)(巻十六・三八六九) ②大船に小舟引き添へ潜く (可豆久) とも志賀の荒雄に潜き逢

いふ鮑玉…(巻十八・四一〇一)

④沖つ島い行き渡りて潜く (可豆久) ちふ鮑玉もが包みて遺ら

⑮…奈呉の海人の潜き取る む(巻十八・四一〇三) (潜取) といふ白玉の…

◆鳥が動作の主体になる例

⑯島の宮 勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず 二・一七〇)

①人漕がずあらくも著し潜きする(潜為) 鴛鴦とたかべと船

0

⑱にほ鳥の潜く (潜) 池水心あらば君に我が恋ふる心示さね⑱ 上に住む(巻三・二五八) 四・七二五

⑪紫の粉潟の海に潜く

鳥玉潜き出ば

(潜出者)

わが玉に

せむ(巻十六・三八七〇

主体となり得る。 右に示したように、 カヅキは「人」と「鳥」の両方が動作の

「入潮為」(万葉集一二三四番歌) の訓読について

る。仮に問題の歌を「カヅキする」と訓むとすると、「海人」く」を「海人」の生業として描いている歌は①の一例のみであること、あるいは潜って海産物をとることを詠んでいるが、「潜は関係がない。この二例を除いた十三例は「海人」が水中に潜は関係がない。この二例を除いた十三例は「海人」や「漁」と気持ちから海に潜る」ことを表しており、「海人」や「漁」と 歌意と一致する形で「潜く」が詠まれているのは①のみであり、 が職業として水中に潜ることを意味する。つまり、問題の歌の れぞれ「池に身を沈める」、「(海で亡くなった)夫に逢いたい 人が動作の主体となる十五例 ① (1) (15) のうち、 ①と②はそ

この他の十二例には寓意がある。その詳細は次の通りである。 いるかのように歌うことで、恋しい人への思いを強調している。 ②は「海人」の潜水という辛く危険な行為を旅人自らがして ④は問答歌であるが、『全注』に

歌意は定かではない。 とあるように他の注釈書においても解釈が分かれており、 することを寓意したものとする見方もできる。 なと歌いかける歌。「潜き」を相手の異性が浮気 (漁色) その

海人の保護者の立場で、「吾れなしに」危険

な潜きはする

女性を手に入れようと苦労すること」として詠む。 男性」に譬え、「海人」が「潜きする」ことを「思いを寄せる 「その娘」、「海人」を「親が大切にしている女性に恋焦がれる また、「鮑」や「忘れ貝」、「玉」(表現は異なるが同じ種類 ⑤~⑧は玉に寄す譬喩歌であり、「海神」を「親」、「玉」 を 0

その形状が片貝のように見えることから「片恋」の譬喩として 貝と思われる)は「恋しい人」「会いたい人」に譬えられる他、

> から動詞「潜く」は「鮑」 も用いられる。この「鮑」は潜水漁によって採れるものである いるとも言えるだろう。 や「忘れ貝」を導く為に用いられて

いられることがわかった。カヅキの用例は「海人」特有の職能例のみであり、その他は主に恋を歌った歌において譬喩的に用 に入れようと苦心する行為」をいう譬喩表現として集中に存在 や身分の卑賤さを表すというよりは、「手に入れ難いものを手 以上のように「潜く」を「海人」の生業として描いた歌 は

(二) アサリの用例

している。

の二種類である。カヅキと同様、 が餌を探す場合は「求食」が用いられている。 方を確認することができる。人が漁をする場合は アサリの表記は仮名書きの例を除くと、「朝入」と「求食 動作の主体として人と鳥の両 「朝入」、鳥

◆人が動作の主体になる例

Aあさりする (阿佐里須流) 知らえぬうまひとの子と(巻五・八五三) 海人の子どもと人は言へど見るに

海人か刈りけむ(巻七・一一六七)

せど乾かず(巻七・一一八六)

◎あざりする(朝入為流)海人娘子らが袖通り濡れにあませい。 ®あさりす(朝入為)と磯に我が見しなのりそをいづれの島 **①黒牛の海 紅にほふももしきの大宮人しあさりすらしも** 入為良霜)(巻七・一二一八) し衣 朝 干。

は今そ鳴くなる(巻十八・四〇三四

⑤あざりする(朝入為流)人とを見ませ草枕旅行く人に我が名 は告らじ(巻九・一七二七)

予草香江の入江にあざる(求食) ◆鳥が動作の主体になる例 **蘆鶴**のあなたづたづし友なし

にして (巻四・五七五)

⊕夕なぎにあさりする(求食為)鶴潮満てば沖波高み己が妻呼。** ؿ (巻七・一一六五)

①あさりす(求食為)と磯に住む鶴明けされば浜風寒み己妻呼 ぶも (巻七・一一九八)

図鴨すらも己が妻どちあさりして (求食為而) 後るる間に恋ふ ①春の野にあさる (安佐留) 知れつつ(巻八・一四四六) 雉の妻恋ひに己があたりを人に

①ぬばたまの夜は明けぬらし玉の浦にあさりする といふものを(巻十二・三〇九一) (安佐里須

(安佐里須流

鶴鳴きて騒きぬ(巻十五・三六四二)

◎奈呉の海に潮のはや干ばあさりし(安佐里之)に出でむと鶴(ない)に出てからない。 てば偶呼びかはすともしきに…(巻十七・三九九三) ◎…射水川 湊の渚鳥朝なぎに潟にあざりし (安佐里之) 潮は満み

> 次の通りである。 れることを不満に思う問題の歌の歌意と合致する。④の詳細は しく、卑下する対象として詠み、「旅人」が「海人」と見誤ら た場面を詠んでいる。特に色は「あさりする海人」をみすぼら みで、その他四例は作者が旅の途中に目にした風景や居合わ 人が動作の主体となる〇〜©五例のうち譬喩歌は®の一

は漁夫の舎の児、草菴の微しき者なり。郷もなく家もなし。何いか」との旅人の問いかけに、釣りをする美しい娘達は「児等んか」との旅人の問いかけに、釣りをする美しい娘達は「児等 けれど、一目見てわかりました。高貴な方のお子であると」と 承け、のは「あさりする海人の子供だとあなた(仙女)は言う ぞ称げ云ふに足らむや。」と答えている。その娘子達の言葉を 達の贈答の一部である。この歌の題詞で、「仙女ではありませ 〇は、松浦川(佐賀県東松浦郡玉島川)を訪れた旅人と娘子

歌う。

つまり、 のによって

【題詞】「児等は漁夫の舎の児、草菴の微しき者なり。…」

【本文】「あさりする海人」

の等式が成り立つのである。 ここまでカヅキとアサリの用例を確認し、次の点が明らかに

なった。

・「海人」と共に詠まれていること。(カヅキ→十五例中九||共通点| アサリ→五例中三例

例

「入潮為」(万葉集 三四番歌)の訓読について

であり、

アサリは海人の生態や職能を表現すると共に、その。*

中賤さを強調する語である。

人が動作の主体となる場合、訓字表記がカヅキでは アサリでは「朝入」に統一されていること。 「人」、「鳥」の両方がその動作の主体となり得ること。

・「海人」が「潜く」ことを歌った十三例のうち、「海人」「相違点」 カヅキは、得難い物を得ようと苦心する事をいう醬喩表現 用例において「海人」の身分が表面に出てくることはない。 させることでより身分の違いが強く表れている。カヅキの な者であることが明確になり、「海人」と「貴人」を対比 アサリの用例のとその題詞から「あさりする海人」が卑賤 に、五例中一例のみが譬喩歌で、四例は旅の風景を詠む。 は全て醬喩歌であること。アサリを含む歌はカヅキとは逆 の漁師としての営みを歌った例は一例のみであり、十二例

では、「カヅキする」よりも「アサリする」のほうが「海人」「旅人」が「海人」と見られる事への不満を表明するこの場面 の形容として適当である。 題の歌は譬喩歌ではなく、旅の景色を歌っている。 しかも

類歌

⑦荒たへの藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ旅行くわ れを(巻三・二五二)

本に云く、「白たへの藤江の浦にいざりする」とい

を(巻七・一一八七)

⑦浜清み磯に我が居れば見む人は海人とか見らむ釣もせな 右の一首は、 柿本 朝臣人麻呂の歌集に出づ。

くに(巻七・一二〇四

国潮速み磯廻に居れば□□□ □する海人とや見らむ旅行く我

を (巻七・一二三四)

を (巻十五・三六〇七)

柿本朝臣人麻呂の歌に曰く、「荒たへの」といひ、

ま

た曰く、「すずき釣る海人とか見らむ」といふ。

られる。 には類歌の関係にあるとされている歌が右に示した通り複数み 注釈書によっても少しずつ記述に違いがあるが、 問題の歌圧

記載はない。 ⑦は人麻呂作、 団は天平八年(七三六年)遣新羅使人歌であり、 ①は人麻呂歌集歌とされ、

⑦田

⑦田

では作者の ⑦の異伝と

され、互いの左注にも記述がある。

う形での「海人」の形容は見られないが、結句の「釣もせなく 見らむ」と詠む点で共通している。⑰には「~する海人」とい 「巳然形+ば」の確定条件節へと続き、第四句で「海人とや(か) 問題の歌回を軸にして見ると歌番号の近いのとはミ語法から

> 日本文學誌要 第76号

る。そこで、全の類歌の一つである⑦とその異伝とされる⑦には集中に複数確認できるが、「潮速み」は空のみの表現である。は集中に複数確認できるが、「潮速み」は空のみの表現である。は集中に複数確認できるが、「潮速み」は空のみの表現である。は、問題の歌空の下の句「海人とや見らむ旅行く我を」は、とその異伝むとほぼ一致している。その上、第三句に「海人」とその異伝がである。と言いている。

⑦には人麻呂作との記載があるが、①には作者名が示されてのに対し、「いざりする」はかなり広く一般的な表現でを経て①に歌い変えられたと見るのが自然であろう。「海人」について、⑦の人麻呂作歌で「すずき釣る」とするのに対し、②は「いざりする」としている。「いざりする」とするのに対し、②は『新羅使人歌であり、年代の記載(天平八年(七いない。②は追新羅使人歌であり、年代の記載(天平八年(七いない。②には人麻呂作との記載があるが、②には作者名が示されてのには人麻呂作との記載があるが、②には作者名が示されて

六の山部赤人の長歌とその反歌にもみられる。このような「釣り」と「いざり」が対応関係にある例は、

[長歌]…あらたへの藤井の浦に鮪釣ると海人船騒き…(巻宍[を歌]…あらたへの藤井の浦に鮪釣ると海人船騒き…(巻宍

(反歌)沖つ波辺波静けみ漁りすと藤江の浦に船そ騒ける(巻

に集中にその例を見ることができる。「あさり」が対応することもあるのではないかと考えた。実際この「釣り」と「いざり」の表現の変化と同じく、「釣り」とてザリとアサリは共に漁をする意を持つ類義語であるから、

(題詞)… かか にままった (巻五・八五三) なうまひとの子と(巻五・八五三) なりする海夫の子どもと人は言へど見るに知らえて文〕あさりする海夫の子どもと人は言へど見るに知らえて文〕あさりする海より。郷もなく家もなし。」 になった。 (中略)「児等は漁夫の舎の魚を対した。 (中略)「児等は漁夫の舎の名の人が、 (をまたり) がいまった。 (本文) あさりする海大の子と(巻五・八五三)

ている。 あるから、発想の似ている類歌間で表現を変えることとよく似あるから、発想の似ている類歌間で表現を変えることとよく似題詞もまた、和歌の前書きとしてその歌の趣意を伝えるものであり、反歌は長歌の意を反復・補足あるいは要約するものであり、

「かづき」の間での転換は一例も見られない。て順当であると言えるのではないだろうか。一方、「釣り」と歌①で「あさりする」に歌い変えられることは表現の変化としへと転換したように、⑦の「すずき釣る」が類歌である問題のよって、人麻呂作歌⑦「すずき釣る」が⑦で「いざりする」よって、人麻呂作歌⑦「すずき釣る」が⑦で

題はない。 用例に続き、類歌の点から見ても④をアサリと訓むことに問

句は「イザリする」と訓んでも良いのではないかという新たなところでイザリとアサリが頻義語なのであれば、問題の第三

「入潮為」(万葉集一二三四番歌)の訓読について

そこで、イザリの用例に目を向けることにしよう。

疑問が生じる。

- ●沖つ波辺波がけみ漁りすと 騒ける(巻六・九三九 (射去為登) 藤江の浦に船そ
- ❷いざりする(射去為)海人の「梶の音」]ゆくらがに妹は心に

●武庫の海の庭良〜あらしいざりする(伊射里須流)乗りにけるかも(巻十二・三一七四) |釣船||波の上ゆ見ゆ(巻十五・三六〇九)

な状況で漁をしていることが窺える。 右の三首から、イザリと歌う場合には比較的波が静かで穏やか

この●~❸に加えて、次の●~●をみると

個 山 沖になづさふ(巻十五・三六二三) .のはに月 傾けばいざりする(伊射里須流) 海人の灯火

(伊射理須 流 海ぁ

●志賀の浦にいざりする (伊射里須流) **☞…海人「小舟」**はららに浮きて大御食に仕へ奉るとをちこち。 ** を言 漕ぐらし|梶の音|聞こゆ (巻十五・三六六四) 海人明け来れば浦廻

「船」や にいざり 「梶」、「沖」などの言葉が詠み込まれる例が多く (伊射里)釣りけり…(巻二十・四三六○) 7

> 沖の漁を表現する傾向にあることがわかった。 ザリの用例十例中七例)、イザリと歌う場合には、 船を使った

ではイザリではなく、アサリが選ばれたと考えられる。 岸近くでの光景を歌っている。よって、初句に「塩早三」とあ アサリは先の用例からも明らかなように、磯や海辺といった 潮の流れが早く磯廻にとどまっている状況にある問題の

几 原文表記「入潮」 の訓読

海人の

ヅキする」よりも「アサリする」のほうが「海人」の形容とし てふさわしいことを述べた。 ここまで用例、類歌について検討し、 問題の歌においては「カ

漢字を当てた義訓であると考えられる。ではなぜ「アサリする」 をみない。「入潮為」は正訓では訓めず、その語義に合わせて 繰り返しになるが、「入潮」の表記は、 しかし、原文表記「入潮」とその訓の整合性が問題となる。 問題の歌のみで他に例

なく、「潮」字に動詞「濡る」の意が込められ、「潮に入って濡 が、それは「水に潜る、くぐり入る」ことを指しているのでは に「入潮為」の表記を当てたのであろうか 「入潮為」は、「潮ニ入ル」意をもって訓むことには違 いない 第76号

さし魚をとろうとして、 の十二例は「海水の干満、潮流」の意で歌われ、「シホ」と訓 れる」ことを暗示したものかもしれない。 潮」字は問題の歌の他、集中に十三例みられる。このうち 次に示した例のみ「ヌレヌ(濡れぬ)」と訓み、 海水で袖が濡れてしまったことを歌う。 小網を 19 日本文學誌要

す児はなしに(巻九・一七一七)三川の淵瀬も落ちず小網さすに衣 手濡れぬ(衣手潮)干

早く、そのしぶきで濡れてしまったことを歌う例がある。また、動詞「濡る」の用例には次の二首のように水の流れが

(巻七・一一四一) 武庫川の水脈を選みと赤駒のあがく激ちに濡れにけるかもいった。

表記を当てたのではないだろうか。廻」に居る自らの姿(旅人・官人)から想起し、「入潮為」の、れる海産物を採ろうと、濡れながら漁をする海人の姿を、「磯来る海産物を採ろうと、濡れながら漁をする海人の姿を、「磯間題の歌も「塩早三」とあり、潮の流れに乗って打ち寄せて

のうらぶれた姿を連想させ、問題の歌の歌意そして「アサリすた、潮に「濡れた」姿は、「海人」のみすぼらしい姿と「旅人」や、舟を出して「イザリする」という行為は結びつかない。ま問題の歌のように潮の流れが早い状況下では「カヅキする」

おわりに

る」の語義とも符合する。

問題の第三句「入潮為」は、集中他に例のない表記である。

察を進めた。その結果、次の点が明らかになった。掛かりに、用例の文脈や類歌間における表現の変化を中心に考சの為、原文表記の面からではなく、カヅキとアサリの語を手

◆アサリを含む歌は譬喩歌一例を除き、その他の四例は旅の景色を詠んでいる。「あさりする海人」=「卑しい者」である色を詠んでいる。「あさりする海人」=「卑しい者」であることを明確に表した用例があり、また「海人」が「海人」と 「貴人」を える。問題の歌は旅の景色を詠み、「旅人」が「海人」と 「貴人」を ことを明確に表した用例があり、また「海人」が「海人」と 「貴人」を うれることを不服に思う歌であるから、歌意とアサリの語義 でうなする。

たと考えられる。実際に題詞と本文との間で「釣る」と「ア「釣もせなくに」という表現から「アサリする」へと転換しが集中の長歌・反歌にみられる。イザリとアサリは類義的にが像中の長歌・反歌にみられる。イザリとアサリは類義的にが頻があり、この他にも「釣り」と「いざり」が対応する例参類歌間で、「すずき釣る」から「いざりする」へ表現を変え

り」と「カヅキ」が対応関係にある例は一例もない。サリする」が対応する例も確認することができる。一方、「釣

潮の勢いに乗って、水際に打ち寄せられてくる魚や貝をとろ潮為」が問題となるが、この箇所を正訓で訓むことはできない。不言で集中の「潮」字の用例から、「潮」字には動詞「濡る」とで集中の「潮」字の用例から、「潮」字には動詞「濡る」でいると考えると、訓「アサリする」とも馴染む。問題の歌していると考えると、訓「アサリする」とも馴染む。問題の歌していると考えると、訓「アサリする」とも馴染む。問題の歌いに乗って、水際に打ち寄せられてくる魚や貝をとろがります。

(あべ みなこ・修士課程二年

ものが目立つが、「アサリする」のほうが適切であると考える。

近年の注釈書は問題の箇所について、「カヅキする」と訓

サリする」に「入潮為」の表記を当てたのであろう。

うと浅瀬に入っていく海人の姿、潮に濡れて汚れた「海人」の。。*

旅に疲れた自らの姿(旅人・官人)を重ね合わせ、